

8・トワちゃんの正体

7 から一週間後。主人公、仕事を終えて自宅へ帰ってくる。

SE 1…主人公が自宅の扉を開錠する音

SE 2…主人公が自宅の扉を開け、閉じる音

〈主人公〉

「……ただいま」

すると、部屋の中に当たり前のようにトワがいる。

トワ、リビングからひよっこり顔を出して主人公に挨拶する。

SE 3…【26 まで流す】主人公宅廊下の環境音

※声が遠くから聞こえる

〈トワ〉

「あー♥ おかえりなさあーい♥ お邪魔してまあす♥」

〈主人公〉

「……トワちゃん！ 来てたんだあ」

主人公、トワのところまで歩いていく。

しかし、主人公の表情に普段のような明るさはない。

SE 4…【繰り返して、合計5 秒分ほど流す】主人公の足音

SE 5…【まで流す】部屋の環境音

〈トワ〉

「はい♥ 合鍵っていいですよね♥

トワも持っていればあ！ アナタがまた鍵なくしても安心ですし♥」

〈主人公〉

「ねー。あの後さとりにも『やるんじゃないかとは思ってたけど、本当にやるとは思わなかった。私、今本当にびっくりしてる』って怒られたもんねえ。

で……。何をしてたの？」

〈トワ〉

「この前の温泉で撮った画像！ 整理してたんですう。
だいぶまとめたんでえ。どおぞご覧になって下さい♥」

〈主人公〉

「えー？ わたし、写真苦手なんだ……。
自分の顔見るの恥ずかしいよ」

SE 6

【0―1秒ほどの1回分のみ流す】トワが主人公に写真を見せる音

〈トワ〉

「これなんて！ すっごく可愛いですよ♥ 半目で寝てて♥」

〈主人公〉

「もう！ トワちゃん。ひどいよー！」

〈トワ〉

「あはは、冗談です♥ トワは大好きですよ。アナタの顔♥

……トワ達。これからもう一つ♥ こうしてお友達でいられたらいいですねえ」

主人公、一見トワと楽しく会話しつつも、実際は心ここにあらず。

主人公、未だにトワを疑うなんて、自分でもどうかしているし、本当にフィクションの見
すぎであることは重々承知している。

しかし、十三年前の十二月、自分と一緒に過ごしたのは、やはりトワではないかと思えて
しまうのである。

当然、確証はない。

自分をその結論に導いたのは『勘』という、いかにも頼りないものだけである。

だが、それでも試すすべはある。主人公、今日、次にトワに会ったら、それを実行してみ
ようと考えながら帰宅したのだ。

しかし、帰宅したらまさか自宅でトワが待っていたことで、急遽今日がその決行日になっ
たことには驚いたが、気持ちを变える気はない。主人公、覚悟を決める。

〈トワ〉

「にしても。遅かったですねえ？」

〈主人公〉

「ああ。買い物に行ってたんだ。だから遅くなっちゃった」

〈トワ〉

「ああ、お買い物にい！ CDショップです？」

〈主人公〉

「うん。好きなバンドがね、結成十五周年なんだって。

それで何か、記念盤？ みたいの出したから買っちゃった。

……トワちゃんも知ってるでしょ？ この前歌ってたもんね」

SE7…主人公がCDを袋から出し、トワに差し出す音

〈トワ〉

「ああ！

イエス！ この人達、トワも知ってますー！

【7と同じ鼻歌を歌う】

ふんふん……ふんふん……ってやつですよー！

【油断して口が滑る】

アナタ。このバンド、大好きですもんね♥

わぁ〜立派な箱♥ 後でトワにも聞かせ……

【主人公がなぜか棒立ちでこちらを見つめているので】

どうしました？」

〈主人公〉

「トワちゃん。わたし、このバンドが好きって、トワちゃんに言ったこと、あったっけ？」

〈トワ〉

【「しまった、と思いつつも何事もなかったかのよう」に】

あれえ？ そうでしたあ？

じゃあ♥ さとりから聞いたんですかねえ？

アナタがこれを、好きだ♥ って」

〈主人公〉

「ううん。さとりも知らない。だってさとりはクラシックしか聞かないから。

昔からバンドの話しても、ちっとも覚えてくれないの。」

だから、そうだね……。わたしがこの人達を好きになった十三年前くらいには、さとりと音楽の話はしなくなってたな」

トワ、ここではめられたことに気づく。

まさか主人公が自分の正体を確かめるために、こんな方法を取るとは思わなかった。
トワ、主人公のことを少し甘く見ていたようだと思える。

〈トワ〉

「……っ。

【ここから※マークまで、声が少し低くなる】

そうでしたね。さとりはクラシックしか聞かない。
アナタと、ロックの話をするはずもない。

だから、トワが知っているとしたら、それは。
昔、アナタとその話をしたからに他ならない。

【少し間を空けてから。声が少し意地悪になる】

ふふ。もしかして試しました？

ワタシ、アナタのこと、完全な善人だと思って。ちょっと見くびっていたみたいです」

〈主人公〉

「……こんなことをしてごめんね。でも、どうしても確かめたかったんだ。

ねえ。トワちゃん、どうして隠していたの？

何か言えない理由があったの？ でも……そんなの、ないよね……？

わたし達は昔友達だった。けど事故のせいで、わたしだけがそれを忘れてしまった。
それだけだね……？」

〈トワ〉

【声のトーンが低くなっている】

言えなかった理由？ そんなの一つしかありませんよ。

【少し間を空けて】

すべてを知ったら、きっとアナタは離れていくと思ったから。

だって変でしょう？ 何でアナタは都合よく、十三年前の。

ほんの一時期の記憶だけをなくしているんです？

そんなの。事故なんかじゃなくて。覚えていられたらまずいと思った誰かが。
故意に消したと考える方が、よっぽど自然じゃありません？」※

〈主人公〉

「え……？」

主人公、トワの予想外の反応に驚く。話が思わぬ方向に運び、どうしたらいいかわからなくなる。

一方、トワ、いずれこうなることはわかっていたが、主人公との幸せな日々がこんな形で終わるのかと思うと悲しくなる。

それでもこれは、さとりの「実験」に付き合おうと決めた時点で決まっていたことである。

あの日の自分は

・さとりに保護され、地球で生きていくための支援をしてもらう

・主人公にもう一度会える

この二つを叶えるために『ただし主人公に正体を知られた時には、完全に嫌われる可能性も受け入れる』と誓った。

それでもトワ、どうしても主人公に期待してしまう。

たとえ記憶を失っていたとしても、主人公は一度自分を救った人間である。

あの時と同じように、自分の存在を許してくれないだろうか……。とってしまうのである。

トワ、そんな思いを振り切るかのように、明るく振る舞う。

〈トワ〉

「【明るく、突然いつもの口調に戻る】

あのお♥ バレちゃったからにはあ。すべてをお見せしますので！

しばらくここで待っていただけます？

準備ができたからお電話しますね♥」

主人公、呆然としつつも、ゆっくり頷く。

主人公、騙すような形でトワの正体を暴こうとした以上、何が来ても受けとめたい……。と思う。

〈主人公〉

「……わかった。待ってるね」

SE8…【0―7秒ほどまで流す】トワの足音

SE9…トワが玄関の扉を開ける音

SE10…【元の音よりも、少し大きめに】トワが玄関の扉を閉める音（閉じるだけ。施錠はしない）

十五秒ほど部屋の環境音のみが続く。

主人公、一人残され、ただ部屋の中で待つ。
そして、なかなか電話がかかってこないな……と思い始める頃、電話が鳴る。

SE11 …【2コール目ですぐに出る】電話が鳴る音

SE12 …主人公が通話ボタンを押す音

〈トワ〉※電話加工

【明るく】

もしもし♡ 急に出ていってごめんなさい♡
でも。アナタはそこにいた方が絶対いい♡ って思いましたので♡

〈主人公〉

「……準備、できたんだ……？」

主人公、緊張しながら問う。

〈トワ〉※電話加工

「はい♡ ではあ。電話は繋いだままで。ベランダまできて下さい。――
それで、外へ出て。斜め上を。マンションの屋上を、見てみて下さい」

主人公、素直に従い、受話器を耳に当てたまま、ゆっくり歩いていく。

SE13 …【0―3秒ほどまで流す】主人公が立ち上がる音

SE14 …【SE4と同様、繰り返して合計5秒分ほど流す】主人公の足音

〈主人公〉

「……？」

〈トワ〉※電話加工

【唐突に】

そういえばあ。アナタが言ってた。一緒に公園に行ったっていうあのお友達！
あれってえ。最初はちっちゃいですけど。成長すると、すごくおっきくなるんですよ

主人公、トワが唐突にそんなことを話し出すので、不思議に思う。

しかし次の瞬間、窓の外に何が待っているかを察する。

〈トワ〉※電話加工

「【声のトーンが下がる】

……たとえば昔は両手に抱いて歩けたのに。
今ではアナタを軽く見下ろすほどになっちゃった」

SE15 …主人公がベランダのガラス扉を開ける音

SE16 …【0―2秒ほどまで流してから足音。その後、291まで小さく流す】外の環境音

SE17 …【SE4、14と同様、繰り返す。今度は合計3秒分ほど流す】主人公がベランダに出る音

主人公、言われた通りにベランダへ出て、指示された方向を見上げる。

SE18 …【大きめに。演出上重要な部分なので、主人公の衝撃が伝わるようにしたい】強い風が吹く音

〈トワ〉※『本当の姿』の加工した声。ここだけ電話加工なし

「ごめんね。ずっと言えなくて……。
できることなら、可愛い女の子のままで、アナタのそばにいたかった……」

SE19 …【0―1秒ほどまでの1回分のみを流す】主人公がその場に尻もちをつく音

SE20 …【0―1秒ほどまでの1回分のみを流す】主人公がスマホを落とす音

主人公、トワの『本当の姿』を凝視する。

それは、トワの言った通り、全長2メートルを優に超える、見たこともない大きな生き物だった。

次の瞬間、主人公『いや、違う。わたしはこの人を知っている』と思う。

『火災の日、自分を助けてくれたのは、間違いなくこの人だ』と確信する。

主人公、今すぐトワの元へ駆け寄りたいと思う。

だが、転んだまま足が動かず、立ち上がれない。

このままではトワに『怯えている』と誤解されてしまうのに、ちっとも動けない。

主人公、火災の件で、周囲は、自分のことをヒーローと呼んでくれた。

しかし、肝心な時に動けなくて、何がヒーローだろう？ トワちゃんを傷つけているだけではないか？ と感じる。

主人公、同時に、トワはおそらく、本当の姿を知られたら、自分に嫌われてしまうと思っ

ているのではと感ずる。

であれば、ますますすぐに向かわなくてはならないのに、何もできない。

対するトワ、主人公の予想通り『これで終わりだ』『自分は主人公に嫌われてしまった』と確信する。

トワ、となるとさとりの実験は失敗ということになるのだろうか。いや、さすがにまだ判断はできないか……。でも、実際答えは確定したようなものでは？ と、意外と冷静な自分に笑ってしまう。

トワ、もうこれ以上『本当の姿』でいることもないと考え、人間の姿に戻る。

主人公は受話器を落としてしまったが、気にせずそのまま話す。

〈トワ〉※電話を落としているので声が遠い

「うふふ♥ ごめんなさい♥ もう戻りましたよー♥」

SE21…【SE20の続き、3―4秒ほど目の2回目の音のみを流す】主人公がスマホを拾う音

主人公、トワの声にハツとし、反射的にスマホを拾う。

主人公が見上げると、そこには謎の怪物ではなくトワが立っている。

〈トワ〉※拾っただけで、耳に当てていないのでまだ若干声が遠い

「びっくりしましたよね。……今のがトワの正体です。

※ここから受話器を耳に当てる。電話加工

【淡々と、落ち着いて】

あの醜くて、おぞましい生き物が。十三年前、アナタとお友達になったもの。

それからアナタが火災の日に出会って……。

それからずっとそばにいた『柊十和子』と名乗った女の正体。

【泣きそうになる】

ごめんね。ずっと言えなくて……。怖い思いをさせて、ごめんなさい。

【涙をこらえて、わざと明るく】

じゃあ、切りますね♥ バイバイ♥」

SE22…【0―5秒ほどまで流す。頭の『ブツ』を、トワの拒絶を示すように大きめに】
一方的に電話が切れる音

〈主人公〉

「……!」

主人公、このままではいけない、と感じ、走り出し、屋上へ向かう。

エレベーターではなく、階段で、部屋の鍵も閉めず、大急ぎで登っていく。

SE 2 3 …【SE 4、14、17と同様、繰り返す。今度は合計7秒分ほど流す。本来の音

よりかなり早く加工する】主人公が走り出す音

SE 2 4 …【本来の音よりも早く加工して、切迫した印象にする】主人公が、施錠していない玄関の扉を開ける音

SE 2 5 …【本来の音よりも大きめにして、切迫した印象にする】主人公が玄関の扉を閉じる音

SE 2 6 …マンション廊下の環境音

SE 2 7 …主人公がマンションの廊下を走る音

SE 2 8 …【0―10秒ほどまで流す】主人公が階段を走る音

SE 2 9 …主人公が、バン！と屋上の扉を開ける音

主人公が屋上の扉を開くと、強い風が吹いている。

もうすぐ春のはずなのにそこは寒く、主人公は身を震わせる。

そこにはトワがいるはずだったが、もう誰もいない。

主人公、絶句し、その場にへたり込む。

SE 3 0 …【0―10秒ほど流し、SE 3 1。その後、324のさとりとの電話開始から音が

小さくなり、トラック終わりまで流れ続ける】強い風の音

SE 3 1 …【0―1秒ほどの1回分のみを流す】主人公がその場にへたり込む音

しかし、主人公、そこでトワにもう一度電話をかけることを思いつく。

SE 3 2 …主人公がスマホを起動する音

SE 3 3 …【元の音は4コールまでだが、加工して8コールまで粘る】発信音。しばらく続き、結局繋がらない

だが、トワ、当然ながら電話に出ない。

主人公、絶望しかけるが、ここで止まっていけない、行動しなくてはいけないと感じる。今度は、震える手でさとり電話をかける。

SE 3 4 …【今度は3コール目が出る】主人公がさとり電話をかける音

一方、さとり、トワからすでに相談を受けていた。
なので主人公から電話がかかってきて、ついにこの時が来たか。と感じる。

〈さとり〉 ※電話加工

「【内容を察して、電話に出るなり真剣な声で】

……もしもし？ どうしたの？ 何か、あった？」

〈主人公〉

「……さとり。トワちゃんがいなくなっちゃったよ」

〈さとり〉 ※電話加工

「……そう」

さとり、予想が当たったと理解し、まずは主人公の出方を見ようとする。

さとりの予想では、主人公は絶対にトワから逃げ出したりしない。

わずかに与えられたヒントからトワの居場所を探り当て、トワ自身の口からすべてを知ろうと考えるはずである。

そもそも、十三年前、主人公が携帯電話に残した日記やスケジュール帳を、あえて削除しなかったのはさとりである。

さとり、主人公が携帯電話の記録を見ることで、主人公が必ず違和感を抱き、やがて真実にたどり着くであろうと確信していた。

さとり、いくらさとりがトワを全面的に保護するための交換条件であるからと言って、また、主人公は絶対にトワを受け入れると確信しているからと言って、トワには残酷なことをしてしまっただけだと思っている。

さとり、トワに対して、次のように考える。トワは合理的なくせに、それ以上に義理堅い性格である。なので、妥当と判断したこと、一度約束したことは、たとえ耐え難いことであつても従うことを知っている。と。

そう。さとりとトワの「実験」という名の約束は、まさにトワにとっては『妥当だが耐えがたく、しかし一度約束したものである以上、必ず守らなくてはならないもの』なのである。さとり、自分達は、自分の言い出した「実験」のせいで、随分回り道をしてしまった。もし自分があんなことを言い出さず、トワをただ『主人公の大切な人だから』という理由だけで保護したなら。そう、自分が『主人公の発言が本当のことなのか知りたい』と欲を出さなければ、三人とも、もっと幸せな未来があつたのではと思う。

トワがさとりに対してどこか遠慮してしまうように、さとりもトワに対して強い罪悪感がある。

なのでさとり、自分の本音はすべて伏せ、今は主人公とトワのためだけに行動しようとする。

える。万が一主人公がトワを見つけれず、トワが逃げ出したとしても、その時は自分がなんとかしよう……。と考える。

〈主人公〉

「さとりは……全部知っていたんだね？」

〈さとり〉 ※電話加工

「……当たり前。ごめんなさいね……ずっと、黙っていて」

〈主人公〉

「それはいいんだ。話せなくて……トワちゃんもさとりもずっと苦しかったよね。

わたしこそ、ずっと何も知らないままできて、ごめんね。

聞きたいことは、別にあるんだ。

……ねえ。さとりは前に聞いたよね。わたしが昔言ったこと、覚えているかって……。

『いつかもし怪物に出会ったら、自分は絶対に優しくする』って。

『自分だけは、きつと友達になる』って……今でも思ってるかって……。

——あれは、トワちゃんのことなんだね？」

さとり、主人公が真実を知ってもひるんでいないのを確認し『予想通りの展開になった』と、ひとまずほっと胸を撫でおろす。

本当は『違う、それは私のことだ。私はあの時、本当は、私の正体を知っても友達でいてくれるかと聞きたかったのだ』と言いたい。

だが、その衝動をこらえ、いつものように冷静に話す。

〈さとり〉 ※電話加工

「ああ……退院した日に聞いたこと？」

【努めて冷静に】

そうよ？ 先にヒントを出したの。

……ああ言えば、貴方ならそのうち気づくと思って。

【「ここよりは嘘だが、ここは本音である。さとりはさとりなりにトワを大切に思っている」

トワちゃんは、私の大切な友達だから。

……真実を知っても貴方が彼女と親しくしてくれるか、確かめておきたかったの。

【「一呼吸置いて。優しく尋ねる」

……それで、どう？ 彼女の正体を知って、今の貴方はどう思ってる？」

〈主人公〉

「会いたい。トワちゃんに会いたい。」

こんな終わりなんて嫌だよ。このままお別れなんて嫌だ」

主人公、意外なほど落ち着き、気持ちもしっかりしている。

さとり『これも予想通り』と思いつつ、主人公のそんな姿に驚く。てっきり、出す答えは同じでも、主人公はきつと泣きながら電話をかけてくるのだとばかり思っていたからである。

さとり、それを聞いて、今、自分は失恋したと痛感する。

主人公にはこれまでも好きな人ができたことがあったが、トワに対する主人公の想いは、今までさとりが見てきたものとは比べ物にならない。

さとり、これが本当の終わりだ。自分はいよいよ主人公の前から消える日が来たのだ、と感じる。それが、トワに残酷な決断を強いた自分に対する罰だとも思う。

であれば主人公とトワをもう一度結びつけるという、自分にとっての最後の役目を果たそうと考える。

協力する姿勢を示そうと、真面目に、落ち着いて情報を伝える。

〈さとり〉 ※電話加工

【※マークまで、優しく諭すのではなく、主人公がトワを見つけられるように、落ち着いて、ゆつくりと的確に情報を伝えるように話す】

うん。貴方ならそう言うと思った。

大丈夫よ。あの子、ああ見えて気が小さくて、臆病だから。

遠くになんか行ってない。

それに本心では、貴方に見つけてほしいと願っているはず。

きつと、貴方ならわかるような場所に隠れているだけよ」※

〈主人公〉

「わたしならわかる場所……？　ありがとう……。わかった、行ってみる」

〈さとり〉 ※電話加工

「そう。思い当たるところがあるのね。

だったら。すぐに行くといいわ。

……頑張って、応援してる。

たとえ誰が相手であろうと、貴方には幸せになる権利がある。

トワちゃんと再会できるように祈ってるわ」

〈主人公〉

「ありがとう……さとり……」

〈さとり〉 ※電話加工

「お礼は見つけてから言っちゃようだい？
待ってるから。……それじゃあ、またね」

SE35 ..電話を切る音

SE36 【0―3秒ほどまで流す】主人公が走る音

SE37 ..主人公が屋上のドアを開ける音

SE38 【0―5秒ほどまで流して、そこからフェードアウトする】主人公が階段を降りていく音

階段を降りる音が次第に小さくなり、フェードアウトする。

※音声ここまで

〈さとり〉

「ダメだな……私……」

さとり、電話を切る。

さとり、主人公と電話で話していた時とは別人のように、よろよろとソファに座る。

さとり、自分は主人公の前では格好つけているものの、実際は大したことのない人間だと痛感する。

『実験なんてするんじゃないかった』という思いと『でも、本当のことを知らせずに深い関係にはなれないと考えているのは、トワも自分も同じだ』という思いが混ざり合い、今はただ、トワと主人公がうまく行くようにと祈るほかない、と感じる。

〈さとり〉

「自分で決めたことなのにね……」

ずっと前から、こうなるってわかっていたのにね……」

さとり、ソファに身体を丸めて座ると、左手の甲で目を覆う。

